

一九世紀以前の那覇を描いた俯瞰的絵図の基礎研究

——年代・構図・系譜——

堀川 彰子

はじめに

一四世紀前後から環シナ海域で琉球が活発な貿易を行っていたことが、琉球外交文書である『歴代宝案』の研究や発掘調査から明らかにされている。一五世紀初頭に琉球が統一されると、中山王国は国王主導の「国営貿易」として貿易を独占した。琉球は東南アジアや日本、朝鮮にも船を派遣し、明の海禁・朝貢政策とあいまって中継貿易国として繁栄した。那覇は琉球で唯一の国際貿易港として大きく発展し、多様な機能を有していたと想像される。一六世紀ころ琉球の貿易は相対的に衰退し、一六〇九年から日本の薩摩藩の支配下に入るが、その後も中国との貿易関係は続き、依然として那覇港は琉球第一にして唯一の貿易港であった。しかし、意外にも一四世紀から一九世紀における那覇の港湾都市とし

ての当時の景観や機能はほとんど明らかにされていない。^②

このような研究状況を招いた大きな理由の一つは、地図的史料の伝存が非常に乏しいことであろう。そういつた古地図は、先の第二次世界大戦で焼失した可能性もあるが、そもそも作成される機会に乏しかった可能性も考えられる。しかし、地図的な史料の範囲を広げて考えるならば、俯瞰的絵図が少なくとも十数点残されており、重要な手がかりになると思われる。それらを個別に用いた研究もあるが、一点の絵図の一部分を恣意的に取り出す形になりかねない危険を伴う。一九世紀以前の那覇を描いたとみられる俯瞰的絵図は管見の限り二点が確認でき、その幾つかについては個別に書誌的検討がなされ、数点の系譜も提示されているものの、大半は作成年代がわかっておらず史料としての用途が限られている。しかし、絵図の内容を総合的に比較・検証することで、

作成年代あるいは景観年代が明らかになれば、さらなる研究の展開が期待できる。本稿の目的は、一九世紀以前の那覇を描いたすべての俯瞰的絵図を対象として、作者と空間的内容とを検討し、作成年代ないし景観年代を絞り込むことと、それらの相互関係を明らかにして系譜を説明することである。

第一章 研究対象と先行研究

ベス、杉本史子編「地図と絵図の政治文化史」東京大学出版会、二〇〇一―二〇〇三、一三四頁、がある。

④ 南出真助「異文化受容空間としての港——一九世紀の那覇港点描——」(追手門学院大学アジア文化研究会編「他文化を受容するアジア」和泉書院、二〇〇〇)一六五―一八四頁。

① 那覇市企画部市史編集室編『那覇市史通史編 第一巻 前近代史』那覇市役所、一九八四。安里進「琉球王国の形成と東アジア」(豊見山和行編『日本の時代史』18 琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、二〇〇三)八四―一五頁。

② 古琉球時代の那覇について「琉球国図」を分析し、若狭町が「倭人」居留地であり中国や東南アジアへの拠点であったことを示したものと、上里隆史「古琉球・那覇の「倭人」居留地と環シナ海世界」『史学雑誌』一一四―七、二〇〇五、一―三三頁、があり、注目される。近世琉球について、高良倉吉「近世琉球における都市の論理」(高良倉吉、豊見山和行、真栄平房明編『新しい琉球史像』榕樹社、一九九六)七五―八六頁、と、高橋誠一「琉球の都市と村落」関西大学出版会、二〇〇三、があるが、必ずしも一次史料から具体的な景観や機能が明らかにされているわけではない。

③ 上空から広い範囲を眺めたような構図の絵図を表す語として本稿では「俯瞰的絵図」を使用する。近世日本(本稿では「日本」に琉球を含まない)の俯瞰的絵図を扱った研究として、うんのかずたか「ちづのしわ」雄松堂出版、一九八五。矢守一彦「古地図への旅」朝日新聞社、一九九二。スミス・D・ヘンリー「一覧図の政治学——幕末期における五雲亭貞秀の国土像」(黒田日出男、ベリ・メアリ・エリザ

一九世紀以前の那覇を描いたとみられる俯瞰的絵図は管見の限り二点ある(表一・写真一―二)。

鎌倉によれば、琉球の俯瞰的絵図は貝摺奉行所絵師の呉著仁によつて初めて描かれた。②一七七〇年から三年間北京に留学した後、初めて中国伝水墨画の様式をもつて旧市役所本(写真三)を画き、これをそのまま踏襲して慎思九が旧浦添家本(写真二)を制作したと論じている。安里は、構図が似ていることから貝摺奉行所の絵師が旧市役所本↓滋賀大本(写真四)↓浦美本(写真五)↓県博本A(写真六)の順で模写したと推測している。③

個々の絵図に関しても、いくつかの先行研究がなされている。

島袋は、旧市役所本の作者を「上ノ蔵の画家友寄某」といい、旧浦添家本に「慎思九落款」があるとす。④謝敷は、浦美本の作成年代の下限を明治二〇年前後とし、第六扇の左端上部の「落平樋川(ウティンダヒージャー)」の樋(とい)が二基あることから

表1 研究対象史料一覧

写真12	写真11	写真10	写真9	写真8	写真7	写真6	写真5	写真4	写真3	写真2	写真1	名称	略称	所蔵者	備考(サイズ等は各写真のキャプション参照)	先行研究で言及のある絵図
「首里・那覇之図」	「首里那覇図」	「首里那覇鳥瞰図屏風」	「首里那覇鳥瞰図」	「首里那覇鳥瞰図」	「琉球進貢船図屏風」	「首里那覇港図屏風」	「琉球交易港図屏風」	「琉球貿易図屏風」	「首里那覇全景図屏風」	「首里那覇泊全景図」	「琉球図」	「首里・那覇之図」	県博本C	沖縄県立博物館・美術館	登記番号二〇九七番。 一九六二年武田氏より購入	
												「首里那覇図」	県図本	沖縄県立図書館		
												「首里那覇鳥瞰図屏風」	那覇市本	那覇市	骨董屋観宝堂より本紙を購入し、後に那覇市が屏風に仕立てたもの。	
												「首里那覇鳥瞰図」	公文書館本	沖縄県公文書館	一九九六年一〇月寄贈「岸秋正文庫」	
												「首里那覇鳥瞰図」	県博本B	沖縄県立博物館・美術館	登記番号一七七八番。 一九五八年平山氏より購入	
												「琉球進貢船図屏風」	京大本	京都大学総合博物館	一九三二年購入	
												「首里那覇港図屏風」	県博本A	沖縄県立博物館・美術館	登記番号一八七八番。 一九五九年比嘉氏より購入	伊従、安里
												「琉球交易港図屏風」	浦美本	浦添市美術館	一九八七年高良氏より寄贈	謝敷、安里、岩崎
												「琉球貿易図屏風」	滋賀大本	滋賀大学経済学部附属史料館	一九六二年彦根市の松井氏より寄贈	安里、岩崎、豊見山
												「首里那覇全景図屏風」	旧市役所本	旧那覇市役所	原本焼失。写真は沖縄県立芸術大学所蔵	鳥袋、鎌倉、伊従、安里
												「琉球図」	岩瀬本	西尾市岩瀬文庫	一九一八年購入	
												「首里那覇泊全景図」	旧浦添家本	旧浦添朝頭家	原本焼失。写真は沖縄県立芸術大学所蔵	鳥袋、鎌倉

注) 先行研究の詳細については、第一章の注を参照のこと

上限を一八〇七年とした。伊従は、首里城正殿の改修と、奉神門および広福門の改規等を手がかりに県博本Aの景観年代は一七二九年から一七六八年、旧市役所本は一七五四年から一七六八年の間であることを示唆している。岩崎は、滋賀大本の屏風の作成年代を一八三〇年代後半以降、明治期には下らないものと推測した。⑦

豊見山は、滋賀大本には進貢船に向かう薩摩役人の小舟の旗に島津家の家紋と「唐物方」の文字が描かれており、一八四四年に「産物方」と改称されたため、滋賀大本の絵図が一八四四年までに作成された可能性が高いと論じている。⑧
右のように幾つかの指摘が積み重ねられてきたが、たとえば伊



写真1 「琉球図」(岩瀬本) 縦27.5×横44.5cm 西尾市岩瀬文庫蔵

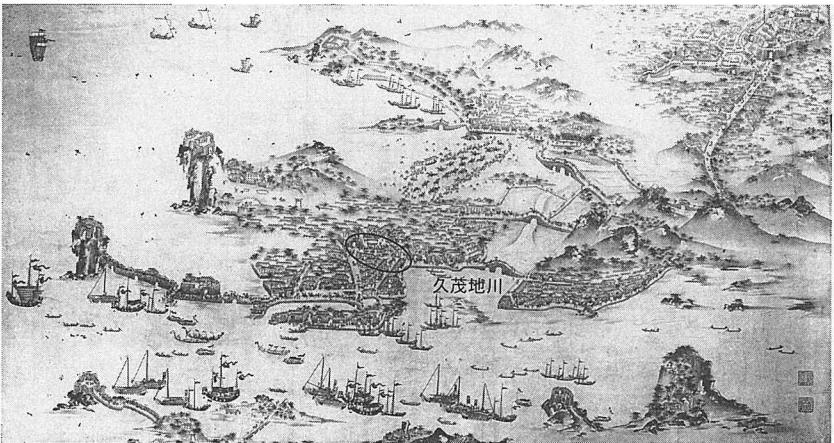


写真2 「首里那覇泊全景図」(旧浦添家本) (写真：沖縄県立芸術大学蔵)



写真3 「首里那覇全景図屏風」(旧市役所本) 六曲半双 (写真：沖縄県立芸術大学蔵)

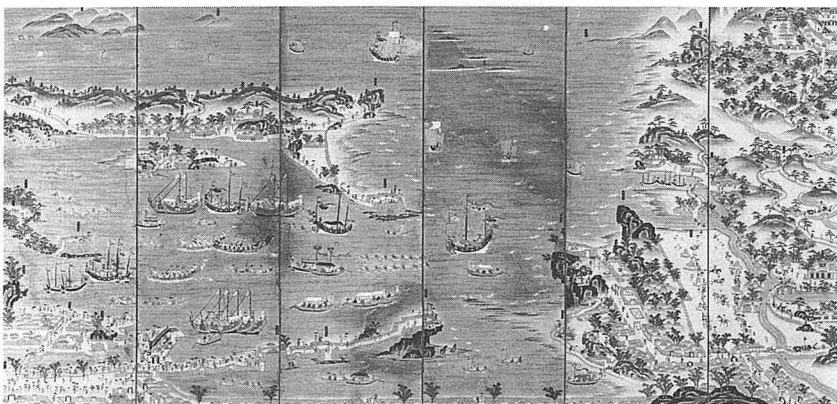


写真4 「琉球貿易図屏風」(滋賀大本) 六曲半双 縦162.1×横332.5cm 滋賀大学経済学部附属史料館蔵



写真5 「琉球交易港図屏風」(浦美本) 六曲半双 縦120×横292cm 浦添市美術館蔵

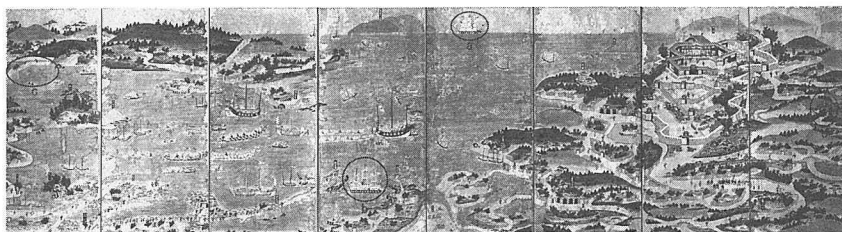


写真6 「首里那覇港図屏風」(県博本A) 八曲半双 縦113×横379cm 沖縄県立博物館・美術館蔵



写真7 「琉球進貢船図屏風」(京大本) 六曲半双、 縦106×横267cm 京都大学総合博物館蔵

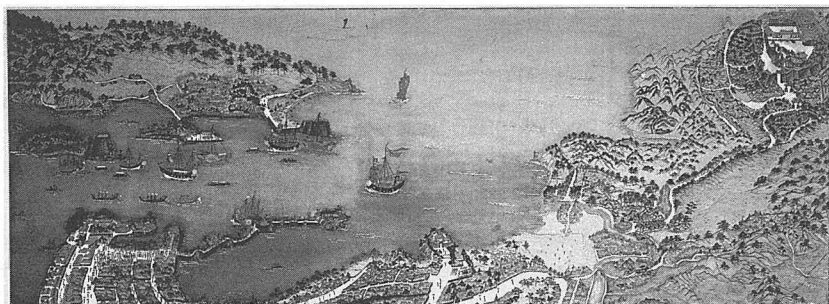


写真8 「首里那覇島瞰図」(県博本B) 縦355×横104.8cm 沖縄県立博物館・美術館蔵

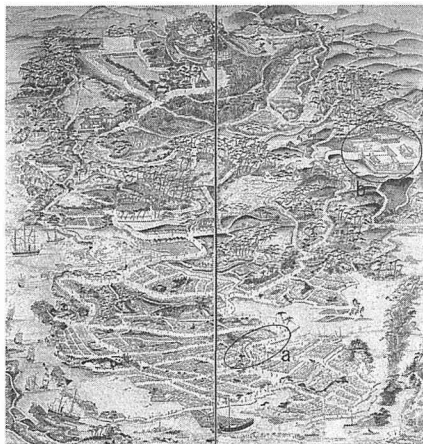


写真10 「首里那覇鳥瞰図屏風」(那覇市本)
本紙縦132×横125cm 那覇市蔵



写真9 「首里那覇鳥瞰図」(公文書館本) 掛軸、縦135.1×横
68.6cm 沖縄県公文書館蔵



写真11 「首里那覇図」(県図本) 縦125×横
116cm 沖縄県立図書館蔵



写真12 「首里・那覇之図」(県博本 C) 掛軸、縦172×横60cm
 沖縄県立博物館・美術館蔵

従と安里らの説には一定の齟齬があるなど、絵図そのものや系譜に関する議論には未だ定まったものがない。このような問題を解決するためには、作成年代と景観年代を厳密に区別した上で絵図群を包括的にとらえていくことが必要と思われる。また全く検討の無い絵図が少なくとも七点残されていることが明らかとなり、これらも含めた総合的な検証を行うことが必要となっている。先行研究を批判的に継承しつつ、一二点の絵図の系譜を検討し、それぞれの絵図を相互比較することで、新たなことがわかると思われる。さらに個々の絵図にも不明点が数多く残されており、特に旧浦添家本の作者が慎思九であるという説は再考の必要がある。以下では、まず作者の検討を行い(第二章)、その上で描かれた

都市景観(第三章)と構図上の系譜(第四章)に着目することにした。

① 漆工芸全般の製作を管掌する役所である。「琉球国由来記」「官爵位階職之事」によると、絵師は七人が召抱えられていたようである(外間守善・波照間永吉編『底本琉球国由来記』角川書店、一九九七、五六―五七頁)。

② 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝——本文編・写真編——』岩波書店、一九八二。なお旧浦添家本、旧市役所本は焼失して現存しないため、戦前(一九二四―一九二七年)に鎌倉が撮影した写真を利用する。鎌倉によると、旧市役所本は無款であるが箱書きに呉著仁の筆という銘記があるという。旧浦添家本は根拠を示さないまま慎思九筆であるとしている。右下に印章が二つあるがこれには触れておらず、未解読となっている(沖縄県立芸術大学附属研究所編『鎌倉芳太郎資料目録』

同研究所、一九九八、四八頁、番号六三参照。

③ 安里進「譚演録 琉球王国と琉球貿易図屏風」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』三三三号、二〇〇〇、一—四頁。

④ 島袋全発「那覇麥選記」沖縄タイムス社、一九七八（初出一九三〇）。口伝によれば浦添御殿の元祖浦添王子朝英が、摂政になったとき（一七九四—一七九七年）に慎思丸を邸内に抱えて製作させた薩摩藩への献納品と同筆同幅の図であるという。

⑤ 謝敷真起子「琉球交易港図考」『きよらさ—浦添市美術館ニューース—』一八・一九号、一九九八。

⑥ 伊従勉「琉球王権の場所—首里城正殿唐破風の誕生とその改修について—」『建築史学』三二、一九九八、一—三七頁。

⑦ 岩崎奈緒子「報告書『琉球貿易図屏風』の成立について—下貼文書の検討から—」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』三四号、二〇〇一、一—二頁。

⑧ 豊見山和行「モノと図像が語る琉球史」『琉球貿易図屏風』を読む（上・下）『沖縄タイムス』二〇〇四、一月五日・一二日（朝刊一版文化二面・七面）。

第二章 書誌的検討

絵図に付された識および落款・印章から作者と作成年代を推定し得る絵図を四点検討する。^①

(一) 西尾市岩瀬文庫蔵「琉球図」(岩瀬本・写真)
岩瀬本には、右上に「中山股元良画琉球之図、兼葭堂蔵幅、天

保四年癸巳暮春令中島憲秀模 韻勝閣蔵」と識がある。琉球の股元良が描いた原画を日本・大坂の木村兼葭堂（一七三六—一八〇二）が所蔵し、一八三三年に中島憲秀が模写した絵図であることが分かる。

原画の作者である股元良について「股姓家譜」^②によると、一七八年生まれであり、雍正七（一七二九）年宮廷画家となり、乾隆一七（一七五二）年進貢使に随行して北京に赴き、乾隆三二年五〇歳で亡くなったということである。^③ 琉球の正史である『球陽』^④ 卷二二、尚敬王一七（一七二九）年には、非凡な画才をもつ十二歳の股元良を禁中に収養するという記事があり、一七二九年から王府で活躍した宮廷絵師であることが明らかである。以上より、岩瀬本の原画の作成年代は一七二九年頃—一七六七年の間と考えられる。

(二) 沖縄県立博物館・美術館蔵「首里那覇鳥瞰図」(県博本B・写真A)

県博本Bは、沖縄県立博物館・美術館の図録から一九八五年に購入されたことがわかるのみである。博物館の説明には「十九世紀中頃以降の那覇港の活況が垣間見れる」と記されているが、その根拠は示されておらず景観年代が十九世紀中頃以降であるとは

必ずしも言えない。

ところで県博本Bは、旧市役所本(写真三)と建物や船の配置が酷似しており、相互の関係が推察される。旧市役所本には鎌倉が撮影した際、箱に呉著仁の銘記があったという^⑥。呉著仁について「呉姓家譜」によると、乾隆二(一七三七)年に生まれ、乾隆二三(一七五八)年に絵師となり、嘉慶五(一八〇〇)年に死亡したという。殷元良に師事していたようである。旧市役所本は呉著仁によって描かれたと考えられ、作成年代は活動時期の一七八年から一八〇〇年の間と推定される。それゆえ景観年代の下限は一八〇〇年と推定される。先述したように、伊従は首里城の描かれ方から、旧市役所本の景観年代は一七五四年から一七六八年の間であることを示唆しているが、この点とも一致する。

県博本Bは呉著仁の真筆とも考えられるが、落款や銘記がないため断定はできない。屏風である旧市役所本の準備段階で呉著仁が描いた絵図、もしくはその模写が現代に伝わったものと考えられる。旧市役所本と同じ景観年代を示している可能性が高く、現存していることから史料価値が高いと言えるだろう。作成年代は、旧市役所本とほぼ同じ時期であると考えられるが、後世の模写である可能性も残されている^⑦。

(三) 旧浦添朝頭家蔵「首里那覇泊全景図」(旧浦添家本・写真二)

旧浦添家本について、鎌倉は慎思九の筆と断定している。「慎思九の家譜」から慎思九の日本名は泉川寛英であることと、乾隆三三(一七六七)年に生まれ貝摺奉行所の絵師となって道光二四(一八四〇)年に死亡したことがわかる。旧浦添家本には二つの印章があり(写真二右下、部分拡大写真一三)鳥袋は慎思九の落款であるとしている。しかし旧浦添家本の印章はいずれも慎思九もしくは泉川寛英と読むには無理がある。また、旧浦添家本以外の慎思九の絵画群の多くには「慎思九印」の印章が付されており、旧浦添家本と同じ印章が使用されたものは管見の限りない。本図を慎思九作とする鎌倉説および鳥袋説は再考する必要がある。

篆刻家の水野恵先生の御教示によれば、上の白文は二文字が左右に並んでおり、右が「慎」、左は「亨」の可能性が最も高いが「克」も考えられるという。下の朱文は「熙」であり、他に煦、燕、熙、熙が考えられるということである。そこで、印章に適合する絵師を「氏集」から探すと、「氏集」の「十一番慎氏(名乗頭字「寛」)^⑧」に「元祖慎可慮王那覇親雲上寛繁、八世泉川筑登川親雲上寛英、支流三子慎克熙泉川筑登川親雲上寛道」という文章を

見つけることができた。このうち「八世泉川筑登川親雲上寛英」は、慎思九のことである。注目されるのは、彼の三男寛道の唐名が慎克熙である点である。旧浦添家本の印章はそれぞれ「慎克」と「熙」を表しているのではないか。

慎克熙の家譜は現存していないと思われ、絵師であったという記録を見つけることはできない。ただ、慎思九の長男慎克明は絵師であったと確認でき、他の絵師の家譜を見ると絵師の息子が絵師になるという例は多いことから、克熙が絵師であった可能性はある。旧浦添家本を父から学んだ筆致で描き、後世に「慎思九」と誤識されたのではないだろうか。

以上より、本稿では旧浦添家本は慎克熙が描いたと考えておく。



写真13 旧浦添家本の印章（部分拡大）

作成時期は、克熙が絵師として活動した期間に絞ることができる。克熙の生年は一七九九年～一八〇一年の間と考えられ、絵師となった時期を父や兄と同じ年齢と仮定すると、一八一六年頃となる。没年は全く不明である。そこで本図の作成年代は一八一六年頃から一九世紀後半頃までと幅広く設定することとする。

(四) 沖縄県公文書館蔵「首里那覇鳥瞰図」(公文書館本・写真九)

公文書館本の左下に落款と印章が付されている。落款は縦に「呉春」と書いてあるといつてほぼ間違いがないだろう。印章(朱文)は二字が左右に並んでおり、右が「呉」左が「春」と読める。この「呉春」とは江戸中期の日本人画家、松村呉春(一七五二～一八一二)と見られる。本図で使用されている印章を他に使っている作品は管見の限りないが、落款は呉春の文化年間(一八〇四年～一八一七年)の「すべり落款」に相当すると考えられる。文化八(一八一二)年に呉春が死亡したことを考え合わせると、作成年代は一八〇四年から一八一一年までの間に絞ることができる。

以上より、四点の絵図に関して、識や落款その他の情報から作成者と作成年代の推定を試みた。作成年代の上限は、次の景観年

代の推定により自ら知ることができるが、下限はわからない。本章で明らかにすることができなかった絵図の作成年代の下限は、絵図が現所蔵場所に所蔵された年としておきたい。

① なお那覇市本（写真一〇）と県図本（写真一一）および県博本C（写真一二）には印章が押されているものの、作者の推定には至らなかった。那覇市本と県図本の印章とでもよく似ており、同じ印章かどうかは不明だが、同一人物の印章である可能性が高い。篆刻家の水野恵先生によると、四文字が上下左右に並んでいて左下の字は「秀」であり、右下の文字は「臣」かもしれないということである。また、県博本Cの印章は「泉教」と記されている可能性がある。

② 「家譜」とは、一七世紀後半に首里王府が家臣団に作成・提出させた系図のことであり、士族身分の男性の生没年や祖先、官職などが詳細に記録されている。田名真之「琉球家譜の成立と門中」（歴史学研究会編「シリーズ歴史学の現在八 系図が語る世界史」青木書店、二〇〇〇）九一―一七頁。絵師の家譜も大半が戦争で焼失したが、比嘉朝健「琉球歴代畫家譜 上」（美術研究）四五、一九三五、二一―二八頁、同「琉球歴代畫家譜 下」（美術研究）四八、一九三五、一三三―三四頁）には、著名な絵師の家譜が収録されている。「股姓家譜」も原史料は確認できず、同「琉球歴代畫家譜 下」二二―二四頁より引用した。

③ 前掲②比嘉「琉球歴代畫家譜 下」二二―二四頁。

④ 「球陽」は、一七四三―四五年、尚敬王時代の修史事業の一つとして編集された（球陽研究会編、鄭春哲原編「球陽」角川書店、一九七四）。琉球王府が編纂させた正史は他に「中山世鑑」（一六五〇）、『蔡鐸本中山世譜』（二六八七）、『蔡温本中山世譜』（二七二四）があるが、

市街地に関する記事は管見の限り「球陽」以外に見当たらない。

⑤ 前掲④原文編二九一頁、読み下し編二八八頁。

⑥ 第一章②参照。なお、「友寄某」が作者であるという鳥袋の説は根拠が示されておらず、ここでは鎌倉説を採用する。

⑦ 前掲②比嘉「琉球歴代畫家譜 下」二二―三四頁。

⑧ 前掲⑦。一七六九年に宮古御蔵筆者の地位に就いた時、貝摺奉行所に送った書状の向上覚に「古座間味親雲上へ相付致稽古」と記されている。

⑨ なお、県博本Bおよび旧市役所本とよく似た権図の絵図として、沖縄県立図書館蔵「武百年前之首里那覇鳥瞰図」（縦三九・五センチメートル、横一〇九・四センチメートル）がある。中央上部の図名の下に「屋慶名政賀筆写」、左下には「昭和十年十月廿五日印刷 著作兼発行人 那覇市辻町三ノ七〇當間清弘」とある。屋慶名政賀は吳著仁の日本名であり「氏集」の「十九番吳氏（名乗頭字「政」）」には「元祖吳著仁屋慶名筑登之親雲上政賀」（那覇市企画部市史編集室編「那覇市史資料編 第一巻五 家譜資料（一）別冊「氏集」」那覇市役所、一九七六、七八頁）とある。吳著仁が描いた絵図が昭和一〇年に印刷（石版色刷）されたものであると思われる。旧市役所本が「武百年前之首里那覇鳥瞰図」の原画である可能性もあるが、細部に差異があるため断言はできない。吳著仁の描いた絵図を昭和一〇年に模写し、石板で印刷したものと考えられる。

⑩ 前掲②比嘉「琉球歴代畫家譜 下」三二―三三頁。

⑪ 前掲⑨那覇市企画部市史編集室編、四三頁。

⑫ 前掲②比嘉「琉球歴代畫家譜 下」三二―三三頁。「慎姓家譜」に

慎克明が嘉慶二二（一八〇七）年絵師となったとある。

⑬ 慎思九は貝摺奉行所絵師であったが、晩年には王府の画家にも進ぜ

られて厚遇された。御後絵の製作にも参加しており、当時や後世の人々の間で知名度が高かった。

⑭ 父思九の家譜に四男五女の名前と生年（長男・三男・四男を除く）が記されており、克熙の前後の兄弟から推測した。

⑮ 呉春は、円山応挙（一七三三—一七九五）とも親交が深かったが、応挙は日本の俯瞰図史上、画期的な変化をもたらした一点透視画法的な「一覽図」と呼ばれるジャンルの始祖とも考えられている（前掲はじめに③スミス、一〇六一—一〇七頁）。

⑯ 小岩普通「寛政期以降の呉春について」『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』四五五、一九八九、二四—三四頁。

第三章 描かれた内容

次に描かれた内容から絵図の景観年代を推定する。特に、都市景観の変化の指標となる五つの出来事に着目することにした。

(一) 一七三三年の宅地化

『球陽』巻一三 尚敬王二一（一七三三）年に「人民日に増し多く、第宅日に増し少し。是に由りて、那覇西の汀地（俗に西海と叫ぶ）並びに唐榮東の汀地（俗に内潟原と叫ぶ）泊邑の前落・若狭町邑の東汀南辺（俗に外潟原と叫ぶ）を賜ひて人民の家宅と為す。」^①とある。岩瀬本（写真一）においては、那覇の西の浜と久米村の東および泊の前（泊兼久に対応すると考えられる）に海

水が浸入しており、陸化していない（写真一、a、b、c）。他の絵図類を見ると、宅地化されている。このことから、岩瀬本のみ一七三三年の宅地化以前の那覇港の様子を描いた絵図といえる。上限については、明倫堂（写真一、d）が明記されており、『球陽』巻一〇 尚敬王六年に「学宮を聖廟の東地に創建す。」^②とあるので、一七一八年とすることができらる。以上より、岩瀬本の景観年代は一七一八年から一七三三年の間に絞ることができらる。

(二) 一七八二年の道路建設

『球陽』巻一六 尚穆王三二（一七八二）年に「那覇東村河辺の道路を新築することを准す」^③とある。那覇東村は「浮島」の国場川沿いに位置し、村中の天使館前（東）広場では市場が立っていた。^④多くの人馬で混雑したため、広場の北に位置する里主館前から久茂地川沿いの道に抜ける道が建設されたということである。旧浦添家本には、里主館前から久茂地川岸をつなぐ道が描かれており、これが史料中の「道路」を指していると思われる（写真二、円で囲んだ部分）。那覇市本、県図本にも天使館前広場から近くの道路に傘を掲げた露天商らしき人々が並んでおり（写真一〇、a、写真一一、a）東村の市と「道路」であると思われる。岩瀬

本、公文書館本（写真九）、県博本C（写真一二）では「道路」を確認することはできない。これら以外（写真三―八）では対象地域が図外となっている。

以上より、旧浦添家本および那覇市本、県図本は一七八二年に「新築」された「道路」が描かれていることから、景観年代は一七八二年以降であり、作成年代も一七八二年以降であると言える。他の九点については、描かれているとも描かれていないとも断言できない。

（三） 一八四四年のフランス船来航

県博本Aの第四扇と第五扇には、欧米船が二隻描かれている（写真六、a、b）。船には欧米人らしき乗組員が計六人乗っていて、望遠鏡をのぞく様子がみとれる。一八世紀末から一九世紀にかけて那覇を訪れた欧米艦隊の様子が描かれたと考えられるが、どの国の船であろうか。ある船の来航風景を同時期にそのまま描いたとは考えられないが、来航以前に描くことはできない以上、県博本Aに描かれた欧米船の初来航時が景観年代の上限となる。

船に掲げられた旗は、縦三分割で旗竿側から白・青・赤の配色である。一八世紀末からイギリス、フランス、アメリカ、ロシア、

オランダの艦隊が琉球を訪れた。これらの国の旗に絵図中のデザインはなく、絵師の見間違いであったと考えざるを得ない。フランス国旗「トリコロール」の配色順を見誤ったのではないか^⑧。フランス船が那覇に来航した記録は一八四四年が初出であり、この時が三色の旗を掲げた欧米船を描いた景観年代の上限であると考えられる。横三分割で同じ三色を配したロシアおよびオランダの旗が見誤りの原因となった可能性もあるが、初来航年はフランスよりも後である。尚、このような船は他の一一点の絵図には描かれていない。

以上より、県博本Aの欧米船に関する景観年代の上限は一八四四年より上がることはない。ここで、一点の絵図の中に複数の景観年代が併存する可能性もあることに留意しなければならない。すでに先行研究で、県博本Aには一七五四―一七六八年の首里城の景観を表す描写と、一八〇七年以降の落平樋の景観を示す描写とがあることが明らかにされている。本稿では、さらに一八四四年以降の景観も描かれていることが分かった。作成年代はその中で最新の出来事が起こった時点が上限となる。この中で最も新しい情報はフランス船の来航であるため、作成年代の上限を一八四四年と推定する。

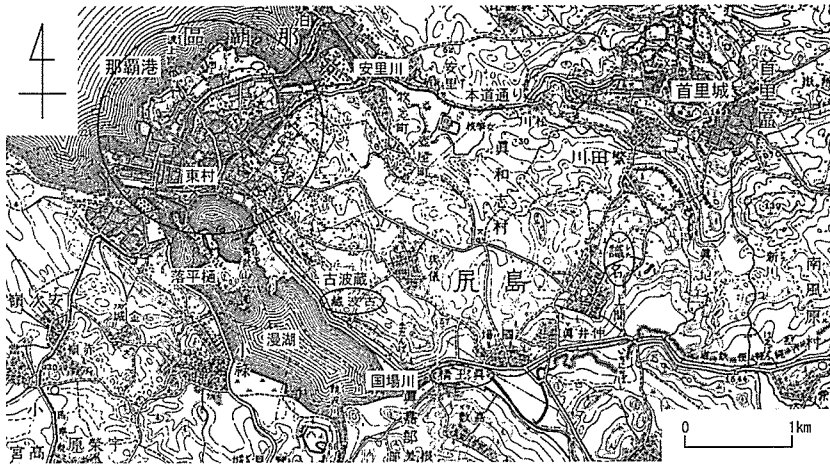


図1 那覇とその周辺（大正10年測量50000分の1地形図「那覇」より筆者作成）

（四）一八七六—八〇年の熊本鎮台分遣隊古波蔵兵営所
一定の独立を保っていた琉球は、明治五（一八七二）年琉球藩となり、その七年後沖縄県となって完全に日本の支配下に入った。明治八年より那覇に熊本鎮台分遣隊の兵営所が設置されたが、明治九年八月三日、真和志間切古波蔵において兵営新設の工事が完成し、九月三日臨時兵営の那覇西村親見世から移転した^⑫。明治一二年、藩主尚泰や旧支配層は首里城を退去し^⑬、翌年には熊本鎮台分遣隊の兵が首里城に入った^⑭。以上より、一八七六年九月から一八八〇年七月までの間に古波蔵村に熊本鎮台分遣隊が駐屯していたことが明らかになった。

それでは、古波蔵村の兵営所はどのような様相であったのだろうか。明治一〇年一月から翌年の六月まで陸軍医として琉球に駐在した渡辺重綱の『琉球漫録』によると、兵営所は「高平」な地であり「東西九十間、南北六十五間、周囲煉石灰高塀」であった。門は「北面中辺」にあり、「門前百二十間新大路ヲ造り、旧徑二通」していたという。また、その背後には東南から西北に流れる那覇川があり「湖形ヲナシ、天然ノ要害」となっているという^⑮。那覇市本、県図本の右上に描かれた白い建物の位置は「古波蔵」の位置と一致し（図一）、その建物や周辺の様子は右の文と一致

表2 各絵図の作成年代・景観年代

	略称	絵師・作成年代	景観年代
写真1	岩瀬本	殷元良原画, 1833年中島憲秀写し	1718~1733年
写真2	旧浦添家本	榎克熙 (1816年頃~19世紀後半)	1782~1875年
写真3	旧市役所本	呉著仁 (1758~1800年)	(1754~1768年) 1733~1800年
写真4	滋賀大本	1807年~江戸時代後期	1807~1844年
写真5	浦美本	1807~1892年	1807~1874年
写真6	県博本A	1844~1959年	(1729~1768年) 1844~1875年
写真7	京大本	1807~1932年	1807~1874年
写真8	県博本B	1758~1958年	(1754~1768年) 1733~1800年
写真9	公文書館本	呉春 (1804~1811年)	1733~1884年
写真10	那覇市本	1876年~不明	1876~1880年
写真11	県図本	1876年~不明	1876~1880年
写真12	県博本C	1888~1961年	1888~1914年

する(写真一〇、b、写真一一、b)。絵図に描かれた白い建物は熊本鎮台分遣隊の古波蔵兵営所であるといえるだろう。尚、古波蔵兵営所が描かれているのは、二二点の絵図のうち那覇市本と県図本の二点だけである。

以上より、那覇市本と県図本とは、景観年代を明治九(一八七六)年から明治一三(一八八〇)年の間と結論づけることができる。^⑮作成年代の上限も一八七六年としておきたい。

(五) 一八八八年の松田橋架橋

県博本Cには、泉崎橋の右側に石橋が描かれている(写真一二、円で囲んだ部分)。「那覇港湾実測図」^⑯に同じ橋が描かれ「松田社」と記されている。「松田橋」は「泉崎橋と旭橋との中間に在って明治一七年簡単な木橋が造られ俗に中毛橋と呼ばれていたが橋が落ち、明治二年第一五二国立銀行支配人松田通信等の経営によって石橋が架けられ松田橋と呼ばれた」ということであり、絵図中の橋は石造りなので、明治二二(一八八八)年に建設された松田橋であると考えられる。よって、この絵図の上限は一八八八年に置くことができる。岩瀬本、旧浦添家本、公文書館本、那覇市本、県図本には橋が描かれておらず、木製中毛橋が建設された一八八四年以前の景観を表していると言える。それ以外の絵図には

この範囲が描かれていない。県博本Cの下限は、大正三（一九一四）年から那覇と首里の間で電車が運行されたが、電車軌道が描かれていないことから一九一四年とする。

以上のように、文字史料と絵図とを対応させて景観年代を推定してきた。これらの考察および先行研究で明らかになっていない景観年代の下限について、旧浦添家本と県博本Aには、進貢船帰港の様子が描かれていることから、進貢船が最後に帰還した一八七五年とする。浦美本と京大本には接貢船帰港の様子が描かれており、最後の接貢船派遣が一八七三年であることから、一八七四年とする。ここまで検討してきた二点の絵図について作成年代と景観年代を表にする（表二参照）。

- ① 第二章④原文編三〇四頁、読み下し編三〇五頁。
- ② 東恩納寛惇「南島風土記」、琉球新報社編「東恩納寛惇全集七」第一書房、一九八〇復刻（初出一九五〇）。那覇市企画部市史編集室作成「那覇の歴史民俗地図」「旧那覇地区」、一九七八。那覇市文化局歴史資料室「那覇市旧跡・歴史的地名地図」「那覇地区」、一九九八。を参照した。
- ③ 「琉球新建儒学碑記」に「大夫妻程順則に碑記有り、建廟の顛末寔に康熙の十三年甲寅の歳に成る。時に尚未だ所謂明倫堂有らざるなり。今其の廟の左方を観るに、室有り新に建つ」とあり、「学宮」は聖廟の隣に建設された明倫堂であることが明らかである（塚田清策「琉球国碑文記」啓学出版、一九七〇、一八六・一八八頁）。
- ④ 第二章④原文編二六九頁、読み下し編二五七頁。

⑤ 第二章④原文編三六八頁、読み下し編三九五頁。

⑥ 大使館は冊封使の宿舎となっていた。一六六三年冊封使として来琉した張学礼の「中山紀略」によると「（天使）館前に空地百畝有り。毎日午後、婦女或いは老、或いは少、篋を携へ莒を翫げ此に聚集し、貿易を為す」とある（那覇市企画部市史編集室「那覇市史資料編第一巻三冊封使録関係史料、原文編・読み下し編」那覇市役所、「一九七七、四五・四六頁）。岩瀬本の久茂地川沿いの道に付された「市場」という文字はこれを指していると考えられる（写真一、e）。

⑦ 前掲②那覇市文化局歴史資料室。

⑧ 一七九四年にフランスで正式に竿例から「青・白・赤」の配色順の国旗が制定されたので、このとき（一八〇七年以降。第一章⑤参照）にフランス国旗が「白・青・赤」であったとは考えられない。しかし、アメリカ国旗やイギリス国旗を見誤った可能性よりはるかに高いと言えるだろう。

⑨ 「評定所文書」年中各月日記一三二五号に「大清道光廿四年 日本天保十五年甲辰三月小：（中略）：仏朗西船一艘、泊沖へ来着有之候。」とある（琉球王国評定所文書編集委員会「琉球王国評定所文書第一巻」浦添市教育委員会、一九八八、三六五・三七二頁。フランス側の史料としては、フォルカード著、中島昭子・小川早百合訳「幕末日仏交流記——フォルカード神父の琉球日記——」、中央公論社、一九九三、一三頁。フォルカード神父はこの後、キリスト教の禁令下に置かれていた琉球の猛反対を押し切つて滞在した。この事件は、那覇や首里にも大きな衝撃を与えられたようである。「球陽」巻二 尚育王一〇年（一八四四年）に「此の年四月十七日、佛朗西人、聖現寺に留住するに因り、五月初四日の那覇江に爬龍舟を瀉原に馬正を関するの事を停止す」とある（第二章④原文編四七二頁、読み下し編五三三五頁）。重要な祭祀が禁止されるほどの大事件を那覇にもたらした一八四四年のフランス船来航の様子を、絵師が絵図の中に取り込んだということ

は十分に考えられるだろう。

- ⑩ ロシア船は一八五四年、オランダ船は一八五九年に来琉した。ゴンチャロフ著、高野明・島田陽訳『日本渡航記』、一九六九、雄松堂書店。琉球王国評定所文書編纂委員会『琉球王国評定所文書第九卷』一五一四号「魯西亜國船來着日記」浦添市教育委員会、一九九三。比嘉春潮『沖縄の歴史』沖縄タイムス社、一九五九、三三三、三三四頁。
- ⑪ 『法規分類大全兵制門三』に「琉球藩へ達（明治）八年五月七日其藩内保護ノ為、第六軍管熊本鎮台分遣隊被置候條此旨相達候事」とある（内閣記録局編『法規分類大全第一編 兵制門三 陸海軍官制三 陸軍三』内閣記録局、一九九一、二七三、二七四頁）。『琉球処分』にも全く同じ記録がある（下村富士男編『明治文化資料叢書 第四巻外交編』風間書房、一九六二、八三、八四頁）。
- ⑫ 東恩納寛博『高泰候実録』原書房、一九七一復刻（初出一九二四）、三二七、三三三頁。
- ⑬ 前掲⑪下村、二二七、二二八頁。
- ⑭ 「陸軍省ヨリ西部監軍部へ達 十三年七月十五日 沖縄県下分遣熊本鎮台歩兵一中隊ノ内、古波蔵村屯在ノ分、今般同県下首里城へ引繼メ、駐屯為致候様御沙汰候事。」とある（前掲⑪内閣記録局、二八〇頁）。
- ⑮ 渡辺重綱『琉球漫録』弘令社、一八七九、七二、七五頁。
- ⑯ 沖縄県立図書館の解説には、「明治一四（一八八一）年頃か」と記されているが、その根拠は示されていない。史料より、景観年代は数年早いことが明らかになった。
- ⑰ 防衛庁防衛研究所図書館所蔵。縦五六センチメートル、横一六一センチメートル、明治四年謄写。
- ⑱ さらに後に建設されたと思われるが、県博本Cには描かれていない。
- ⑲ 前掲②東恩納、三四九、三五〇頁。
- ⑳ 沖縄電気軌道株式会社によって、那覇の大門久米を起点として那覇

から首里まで四キロ余りに及ぶ軌条が敷設され、電車が運行された（沖縄県教育委員会編『沖縄県史別巻 沖縄近代史辞典』同委員会、一九七七、三八二、三八三頁）。

㉑ 赤嶺誠紀『大航海時代の琉球』沖縄タイムス社、一九八八、四、四五頁。後述の接貢船派遣についても同様。

第四章 構図と系譜

ここまでの作成・景観年代の検討を踏まえつつ、絵図の構図を比較してその系譜について考えてみたい。まず、一二点の絵図を構図から分類する。岩瀬本、旧浦添家本、旧市役所本、滋賀大本、浦美本、県博本A、京大本、県博本Bは陸に視座が置かれ、右上に首里城、左に那覇港が配されている。そのうち岩瀬本、旧浦添家本は首里と那覇を南方から眺める構図であり、他と区別できるのでグループAとする。残りは画面の左右に泊港と狭義の那覇港とを分けており、グループBとする。これらに対し、海に視座を置いた公文書館本、那覇市本、県図本、県博本CはグループCとする。以上の三グループの構図からは、古絵図の系譜を読み解くことができよう（図二）。

那覇を俯瞰的に描こうとする試みは、一八世紀前半に琉球王府の絵師股元良によって初めて行われた。前述のように鎌倉は鳥瞰的に那覇を描く図法の始まりを一八世紀後半の呉著仁と指摘した

絵師の活動期	空間的变化	構 図				
		グループA	グループB	グループC		
1729年	1733年宅地化	殷元良画 ↓ ↓ ↓	旧市役所本 ↓ ↓ ↓	公文書館本 ↓ ↓ ↓		
↑ 殷元良 ↓ 1767年 ↑ 呉著仁 1758年 ↓ 1800年						
1804年	1782年新道建設	旧浦添家本 ↓ ↓ ↓ ↓	県博本B ↓ ↓ ↓	県博本C		
↑ 呉春（※） 1811年 1816年	1807年落平増設				滋賀大本 浦美本 京大本	
↑ 慎克熙 19世紀後半	1844年仏船来航				1833年岩瀬本	県博本A
	1875年最終進貢船 1876～80年 古波蔵兵營所 1888年松田橋架橋 1914年電気軌道					那覇市本 県図本

図2 那覇を描いた俯瞰的絵図の系譜
 下線：日本の絵師によって描かれたと推定される絵図
 →：構図上の影響が見られるもの
 ↗：模写もしくは同時に描かれたもの
 ⋯→：景観の具体的な描写における影響が見られるもの
 (※) 呉春については、公文書館本の作成推定時期を指す

が^①、それより半世紀ほど早く描かれていたことになる。原画は現存しないが、その模写図が岩瀬本である。那覇の南方から首里と那覇港を一望の下にとらえるグループAの構図をとる。構図上のデフォルメも若干見られるが、「単視点斜景図」に近い自然な俯瞰的絵図である。^②

殷元良の絵図をもとに大きく変化させたのが、一八世紀後半の呉著仁の絵図である（旧市役所本・県博本B）。師匠である殷元良の絵図には飽き足らず、那覇港の中心上空を想定して進貢船帰港の様子を正面から迎えるように空間を極端に湾曲させている。呉著仁の絵図は、国際港としての那覇港を表すことに重点が置かれていると考えられる。

殷元良の絵図にみられるグループAの構図を受け継ぎつつも、呉著仁の絵図の要素を取り入れ、より詳しい景観図を描いたのが慎克熙である（旧浦添家本）。岩瀬本とほぼ同じ構図であるが、崇元寺から首里城に向かう道

(本道通り)が大きく南に迂回するようにデフォルメされており、道沿いの建物も詳細に描かれている。これは那覇や首里という町を説明するため意図的に「逸脱」^⑥させているものと思われる。さらに旧市役所本や県博本Bと同じく進貢船の入港やハーリー船競漕、競馬とそれを見学する人々が描かれている。それゆえ、呉著仁が始めた新様式がそのまま踏襲されたという鎌倉の説は、やや単純な見方だといえる。

呉著仁の始めた構図は、琉球の人々に親しまれたようで、その後たびたび描かれ、グループBを形作るようになった。安里が指摘したように、一九世紀中頃に描かれた滋賀大本、浦美本、県博本A、京大本の屏風は呉著仁の構図を受け継いでいると考えられる。視点を低く想定し、画面中央に描かれていた那覇の町を右に寄せる事で、海との接点である那覇の様相をより明確に見せている。船もより大きくなり、重心が船にあることを感じさせる。さらに落平の数が増えているなど細部に変化が見られ、現状を反映した絵図であることがわかる。滋賀大本と浦美本の構図は酷似しており、何らかの形で深い関係があると考えられる。京大本は首里城と周辺が描かれていないものの、その他はよく似ており、滋賀大本、浦美本と関係が強いと思われる。県博本Aは、呉著仁の構図を受け継ぎつつも、屏風の大きさが他よりも二隻多いことと、

デフォルメがより極端になっていることで広範囲の景観を描き出している。さらに、欧米艦隊の来航風景を描写するなどの差異が見られ、以上三点とは系統を異にすると考えられる。安里は、県博本Aが滋賀大本、浦美本の系譜を受けて単純化したと位置づけているが、必ずしもそうとはいえないだろう。グループBのの構図は、昭和期に入ってから親しまれ、那覇の人によって模写・印刷されたことが、沖縄県立図書館の「式百年前之首里那覇鳥瞰図」からわかる。^⑦

以上のグループA・Bの絵図はいずれも、貿易港那覇の繁栄を全面に押し出す琉球の視点が表れているといえるだろう。

それらとは全く違う視点と構図で、一九世紀初頭に描かれたものが、グループCにあたる呉春の絵図である(公文書館本)。画面の上中央に首里城を頂き、そこへ足元の那覇港から向かう本道通りを中心に画面が構成されている。^⑧「曼荼羅式道中図」に近い構図であると考えられる。それまでの絵図に比べて首里城周辺やそこへ向かう道が丁寧に描かれている反面、那覇港は軽視されている。船は小さくわずかに点在するが、港町としての那覇という性格は影を潜め、琉球王府の権力拠点の首里城に重心を置いている。またこれは、江戸時代の日本の絵師によつて描かれた。海から陸を眺めるといふ、グループA、Bとは異なった視点で描かれ

ている事は、「琉球外」Ⅱ「日本」からの視点と考えられ興味深い。すなわち「外」からやってくる人が、那覇に上陸して権力の中心地首里へ到る道を案内する「道中図」ともみられるのだ。

作者呉春が琉球に渡っていない事を考え合わせると、呉春には元となる絵があったのか、それともほかの構図で描かれた首里や那覇を独自の構図に書き直したのか、のどちらかであると思われる。呉春の構図は明治初期のより日本の支配が強力になる琉球藩の時代にまた描かれる（那覇市本、県図本）。このときは、日本の軍隊の兵営所が克明に描かれており、日本の視点がより明確に現れているといえるだろう。その後沖縄県として完全に日本の領内に入った明治二一年以降に同じ構図で描かれている（県博本C）。県博本Cでは、城壁がかなり高く描かれ首里城がそびえ立つように見える。景観年代は、一八八八年から一九一四年と幅広く推定しているが、明治二九（一八九六）年まで首里城は熊本鎮台の兵営所であり、その時期に描かれた可能性も高い。グループCの構図は、首里城が群を抜いて大きく描かれているのに対して、狭義的那覇港は小さく狭く表され、ハーリー船競漕や進貢船帰港など港の華々しい一面も描かれず、絵図の重心が首里城に置かれていることが明らかである。支配者側の日本の視点が如実に表れた構図といえるだろう。

① 第一章②。

② 図の右端の橋に「摩飯橋」と注記があり、これは国場川に架けられた「真玉橋」のことであると思われる（写真一、f、図一）。

③ はじめに③うんの、一〇三頁。

④ はじめに③矢守、二六、三一頁。

⑤ 岸文和「菊屋版『うきを京中一目細見之圖』について——はじめての「都市鳥瞰図」——」「國華」二二四号、一九九七、五一―五頁。

⑥ 屏風左端上部の橋は「真玉橋」であり（写真六、c）。右端中央には「敷名御殿」の注記が見られるが、これは首里の南方に位置する「識名園」のことであると思われる（写真六、d）。那覇港上空付近を軸に三六〇度近く回転し、俯瞰した景観を描いていることがわかる。

⑧ 第二章⑨

⑨ これは矩形の紙面に全コースを屈曲させて全体を鳥瞰図風に仕上げる手法である（前掲はじめに③うんの、一五七―一七二頁）。グループCの絵図は共通して、九十九折りに坂を登るように本道通りが描かれており、類似した手法であると考えられる。

⑩ 当時の日本で種本となるような絵図が描かれていたという記録は管見の限りない。ところで、葛飾北斎が琉球を訪れることなく、周煌の『琉球国志略』の挿絵をもとにして一八三二年に「琉球八景」を描いたことが知られており、呉春が中国の冊封使の出版物を参考にした可能性も考えられる。明・清時代を通じて冊封使は三回琉球に派遣され「使録」が二本出版されており、そのうち付図として那覇が描かれているものは、蕭崇業（謝杰）『使琉球録』（一七五九年）、胡靖『琉球国記』（一六五三年）、徐葆光『中山伝信録』（一七二二年）、周煌『琉球国志略』（一七五七年）がある。いずれも部分図であり、呉春の画の種本と思われるものはない。しかし、殷元良の描いた絵図を大坂の木村兼葎堂が所蔵しており、呉春が兼葎堂と同時代に京都や池

田で活躍していたことを考えあわせると、股元良の絵図や「使録」を参考に呉春が創作したと考えることは不可能ではない。

おわりに

以上の検証を通して、二二点の絵図の大まかな景観年代と作成年代が判明した。そして、貿易港那覇に重心を置いた琉球人的な視点と、首里城に重心を置いた日本人的な視点という二つの大きな流れがあることが明らかになった。個々の景観年代と作成年代は、今後の研究の一つの基礎を提供するだろう。これらの史料をより詳細に分析することで、近世後期から近代初頭の那覇の景観構造を解明し、さらには環シナ海に点在する他の港町との共通性・相違に基づく多様性を明らかにすることが期待される。都市景観復原の史料としての観点では、旧浦添家本、旧市役所本、那覇市本、県図本は信憑性が高いと思われる。反対に、岩瀬本と公文書館本は低いと思われる。また視点を変えれば、琉球の俯瞰的絵図が日本に渡った経緯を調べることで、日本の鳥瞰図の歴史に与えた影響が、検討課題として浮上することにもなる。琉球絵図が中国福州の影響を受け、日本京都の公家に渡っていることは既

往研究で知られているが、琉球の俯瞰的絵図が中国や日本との関係の中でいかに発展し、相互に関係を与えたかを明らかにすることも可能となろう。

このように本稿の研究は、今後の研究の礎石となりうる成果として一定の価値をもつものとなった。更なる研究の展開を期したい。

- ① 琉球絵師呉師虔（山口宗季、一六七二—一七四三）は福州に留学して帰国後、京都の公家近衛家熙から花鳥画の製作を依頼されている（林進「沖縄の画家山口宗季について」『大和文華』六一、一九七六、二五—四八頁）。日本絵画史上、江戸時代中期は停滞期といわれているが、近衛家熙を初めとする公家文化が琉球を通じて「写生画」を積極的に収集し、それが後の応奉らに受け継がれていったとも考えられる。近藤社「江戸時代中期の公家文化における画家の研究——近衛家熙と「中山花木図」をめぐる——」『鹿島美術研究』一七号別冊、二〇〇〇、四三九—四五八頁。

〔付記〕 本稿を作成するにあたり、多くの博物館、図書館関係者の方々にお世話になりました。特に篆刻家の水野恵先生、沖縄県立博物館・美術館学芸員の稲福恭子さん、平川信幸さんには史料検討の上で、重要な助言をいただきました。末筆ながら記して心より感謝申し上げます。

the relationship between emperor and influential figures grew precarious, challenges to the emperor were manifest in the form of advice or plots. Basil I also encountered a plot in the spring of 886, and was pressed to reinstate Leon due to the exhortation of Senators and especially Stylianos Zautzes, Basil's reliable subordinate and *Hetaireiarches* (Commander of Imperial Bodyguards).

Although Byzantine emperors could exercise the supreme power within the Byzantine political mechanism, emperors could not disregard the intentions of other powerful members of this mechanism in managing the affairs of state.

A Bibliographical Study of Bird's-eye-view Pictures of Naha
prior to the Nineteenth Century:
Chronology, Composition and Genealogy

by

HORIKAWA Akiko

Twelve bird's-eye-view pictures of Naha 那覇, the international port of medieval and modern Ryukyu 琉球, are examined bibliographically in order to promote further study of the historical geography of the trade networks in the East China Sea. Reexamination of the autographs, seals, and changes in landscape representation shows that the pictures were created between the eighteenth and early twentieth century and executed under the influence of earlier works. The study also shows their origin dates back to In Gen-Ryo 殷元良 (1718-1767), a painter associated with the Ryukyu court. The dominant compositional element that was typical in the work of In Gen-Ryo's and other Ryukyuan painters was a view of the ocean from the land, emphasizing the prosperous international port, whereas several works by Japanese painters focused on Shuri 首里 castle as seen from out at sea.